Tohoku Gakuin University Today.

ΟΥΡΑΝΟΣ

ウーラノス

「ΟΥΡΑΝΟΣ（ウーラノス）」は、「天」を意味するギリシャ語です。リカオニア州の町リストラの人々が伝道者パウロを「ヘルメス」、バルナバを「ゼウス」と呼んで、拝もうとしました。その時、パウロたちは、「わたしたちも、あなたがたと同じ人間にすぎません。…生ける神こそ、天と地と海と、そしてその中にあるすべてのものを造られた方です」（使徒言行録14章15節）と告げました。この個所にも οὐρανός の語が用いられています。

Vol.18
2005
FEBRUARY

東北学院大学 広報誌
TOHOKU GAKUIN UNIVERSITY

特集

「知の拠点としての東北学院大学――学の最前線から――」

「創造」。たゆまぬ知的営為の積み重ねのうえに新たな創造が生みだされます。人類の福祉に大きく貢献できるような創造は、研究者一人のみによって成し遂げられるものではありません。まず、教職員、学生が一丸となって新たな知的創造に協働するとともに、その伝道の場としての大学の役割を再認識することが重要だと思います。その上に立って、知的創造の拠点としての大学の使命を着実に果たしていきたいと考えています。

特集 NEW WAVE T.G.U.
各種学会全国大会開催報告――1
学生たちは、今――5
同窓生を訪ねて――6
協奏、そして共創へ――7
学長室より――9
大学院より――10
学部より――11
国際交流部より――13
研究所・センターより――13
図書館より――13
入試センターより――14
歴史を伝え、今に導く――14
就職部より――15

知の拠点としての東北学院大学

学の最前線から

2004年度、本学では学問研究の場であるさまざまな学会の全国大会が開催されました。今回は「知の拠点としての東北学院大学～学の最前線から～」と題して各種学会の全国大会の様子や取り組むべき課題、先端研究などについて紹介いたします。

日本西洋史学会 第54回大会

日本西洋史学会は、日本における西洋史関係の学会の中で最大規模を誇る学会(会員数2,800名)で、毎年1回全国大会が各大学の持ち回りで通例土日に開かれてきました。仙台では、これまで2回東北大学で開催されましたが、その第54回大会が本学の主催で2004年5月21日(金)と22日(土)の2日間、27年ぶりに仙台で開かれました。むろん本学での開催は初めてです。

すでに2年前から本学ヨーロッパ文化研究所のスタッフが中心となって大会準備委員会を結成し、綿密に計画を立て、大学院生等の協力を得て着々と準備を整えてきました。初日は全行事を一括して執り行える仙台国際センターを会場とし、土曜日は、土樋キャンパスを会場とすることにしました。

大会はこれまで通例、初日に講演会またはシンポジウム、そしてその終了後に総会と懇親会を行い、2日目にはいくつかの部会に分かれて個別の自由論題報告を行う形を取ってきました。しかし今回は大会の内容を充実させるため、講演ではなく大小3つのシンポジウムを行うことにしました。

初日には、「帝国の終焉と国際秩序の再編―アジアをめぐる欧米諸国の相克―」をテーマとする国際シンポジウムを開催することにし、3人のゲストスピーカーとしてロンドン大学のトムリンソン教授、コルゲート大学のロッター教授、東京大学の木畑洋一教授を招聘しました。3人

日本西洋史学会 第54回大会

日本ヒューマン・ケア心理学会 第6回大会

文学部 教授
平田　隆一

の教授は、本学史学科の渡辺昭一教授による問題提起の後それぞれの立場から報告を行い、その後、それらの報告を巡ってフロアの参加者との間で活発な議論が展開されました。2日目には、部会別報告の後、2つのミニシンポジウム「ヤマから見る歴史」と「近現代ヨーロッパにおける連邦制の世界史的位置」を行いました。これら3つのテーマのうち「帝国」と「連邦制」は、歴史上の問題であると同時に現代世界の焦眉の問題でもあり、他方「ヤマから見る歴史」は、全く新しい視角から歴史を捉え直そうという試みであり、いずれも時宜を得た企画だったと思います。

2日目の部会別自由論題報告は、午後のミニシンポジウムの開始時刻に合わせてすべて2時半までに終了するように、9つの部会、すなわち古代史部会、古代・中世史部会、中世史部会、近世史部会、近代史部会Ⅰ、近代史部会Ⅱ、現代史部会Ⅰ、現代史部会Ⅱ、アメリカ史部会に編成し、各部会で5、6人の報告者がそれぞれ専門の研究を一人45分の持ち時間で報告しました。

本大会は、ほぼ例年通り約800人が参加して盛況でした。しかも今回は、広く非会員、一般市民にも公開され、特に県内外の高校の社会科教諭が大勢参加しました。

最後に、学外の諸機関・施設からいただいた多くのご協力に心から感謝申し上げます。

日本ヒューマン・ケア心理学会 第6回大会

教養学部 教授
堀毛　裕子

日本ヒューマン・ケア心理学会は、1999年に設立された新しい学会ですが、看護・介護・世話などヒューマン・ケアにかかわる領域における心理学的研究の推進を目指す、実践的・学際的な、すなわち、ある意味では欲張りな学会です。したがって会員も心理学を専門とする者に限らず、看護師、保健師、助産師、社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士、理学療法士、作業療法士、保育士などの幅広い職域からの参加が特徴的です。

2004年の第6回大会は、教養学部人間科学専攻の学生たちに手伝ってもらいながら、8月26日（木）と27日（金）の2日間にわたり、土樋キャンパス8号館を会場として開催しました。本大会では、高齢化や過疎化が進む一方でコミュニティの力を保っている東北の地域性を生かしたいと考え、大会テーマを「地域に生きる―暮らしとヒューマン・ケア―」として、講演・シンポジウム・研修会をすべてこのテーマのもとに企画しました。

招待講演は、宮城学院女子大学名誉教授・山形孝夫先生をお迎えして、「砂漠の修道院―生と死の境界：ナイル川の西の砂漠で考えたこと―」と題するお話をいただきました。宗教人類学の立場からのフィールド・ワークやターミナル・ケア、樹木葬などの経験に関するスライドやビデオを多用したお話からは、生と死というヒューマン・ケアの基本的な問題にかかわる貴重な示唆を与えられたと感じています。

シンポジウム「地域の暮らしにおけるヒューマン・ケアの実践」では、グループホームによる地域での痴呆高齢者への援助（グループホーム「ひまわり」総所長・内出幸美先生）・行政の立場からの高齢者と知的障害者の共生型グループホームの試み（宮城県保健福祉部地域福祉課課長補佐・本間照雄先生）・在宅ホスピスケアの実践（保原中央クリニック麻酔科医・佐藤智子先生）について話題提供をいただき、指定討論として、コミュニティ心理学の立場（東北大学大学院・吉武清實助教授）及び社会福祉論の立場（東北学院大学・阿部重樹助教授）からのコメントをいただきました。東北の各地に根ざした貴重な実践報告と、異なる視点からのコメントを得て、地域におけるヒューマン・ケアのあり方を再確認することができたように思っています。

また今回は、本学会の岡堂哲雄会長（聖徳大学大学院教授）による「家族支援とヒューマン・ケア―家族カウンセリングのすすめ―」と題する特別研修会を開催し、会員外の関連職種の方々にも熱心なご参加をいただきました。

研究発表には大学院生の会員の活躍が目立ち、ヒューマン・ケアにかかわる心理学的研究・実践に若手の方々の関心が寄せられていることを心強く感じました。技術革新・情報化社会といわれながら、他方では人間の生き方が問われている現在、ヒューマン・ケアに関する研究と実践を目指す本学会としても一層の発展が求められています。

各種学会全国大会開催報告

知の拠点としての東北学院大学

学の最前線から

第65回 応用物理学会学術講演会

第65回 応用物理学会学術講演会

工学部 教授
星宮　務

2004（平成16）年9月1日（水）から4日（土）の4日間、東北学院大学泉キャンパスで第65回応用物理学会学術講演会（主催：社団法人応用物理学会、協賛：東北学院大学）が開催されました。昨年度、電気学会全国大会が同じ泉キャンパスで開催されましたが、その参加者数を大きく上回る6，500名を超える研究者が全国から訪れ、「放射線・プラズマ／計測・制御／光／量子エレクトロニクス／光エレクトロニクス／薄膜・表面／ビーム応用／応用物性／超伝導／有機分子・バイオ／半導体／結晶工学／非晶質／応用物理一般」の分野、38の会場に分かれて学術講演が行われました。同時に20分野のシンポジウムも開催され、「カーボンナノチューブ」や「テラヘルツ電磁波技術」などの最先端の研究に関する討論が行われました。

開催にあたっては、約2年前から本学、東北大学、並びに理工科系の学部を有する各大学の応用物理学会員が現地実行委員会（委員長：山本正樹東北大学教授）を結成して準備を行い、本学事務職員の方々の多大のご協力を得て大会の開催にこぎつけることができました。

今回の学会では、学会の標榜する「男女共同参画社会の実現」のために、託児室のサービスも提供され、若手女性研究者や夫婦の研究者をサポートする試みも行われました。

すべての講演会場が2号館1つに収納できたために、「移動が容易だ」と学会参加者から大変好評でした。また電子メールなどに利用していただくためにパソコンを1教室に50台用意し、またインターネット用のLAN端末を多数設置した演習室を2教室開放して便宜を図ったことも参加者から大いに感謝されました。

また期間中、体育館で最近の技術動向を伝える理化学・計測機器の専門メーカーの展示会も開催されました。会場内には大学からの先端的な研究の紹介コーナーが設けられ、東北大学など地元の大学からの研究内容が紹介されました。本学にも開催校として2つのブースが与えられ、半導体センサー（電気情報工学科・木村光照研究室）と光音響顕微鏡（物理情報工学科・星宮務研究室）の研究内容が展示されました。さらに、本学の新しい情報処理教育の中核となるユニックス系のOSである「Knoppics Edu TGU」が紹介され、多数のアプリケーションの入ったCDが無償で参加者に配布されました。

なお、本学出身の株式会社アールデック代表取締役佐々木友章氏から、自社製品のRHEED（低入射角電子線回折装置）が本学工学部に寄贈されました。あらためて感謝申し上げます。

日本財政学会 第61回大会

日本財政学会第61回大会は、2004年10月30日（土）と31日（日）の2日間、東北学院大学土樋キャンパスを中心に開催されました。100人近くの報告があり、日本財政学会としては1･2位を争う大規模な大会になりました。参加者の中には本学の学生も含めて非学会員の参加が多数見られたのが特徴でしたが、ここでは、参加者が多かった分科会を中心に学会の模様を報告します。

今大会では次のテーマを共通論題として選定しました。『社会保障改革』、『地方財政改革』、『税制改革』、『高等教育の財政問題』、『アジアの財政』、『国債の累積とインフレの可能性』。このほかに、公共投資で共通論題が予定されていたのですが、報告者が少なく共通論題としては組めませんでした。以前であれば公共事業の政治経済学的分析として盛んに論じられたテーマであり、これが共通論題として成立しないとは予想外のことでした。公共事業に対する批判が強まるとともにその削減が続く状況で、会員の志向も変わったようで、PFI（民間資金の公共投資での利用）に関する報告が多く見られました。

社会保障改革では、予想通り2004年の年金改革に関する報告が多くなりましたが、医療保険に関する実証分析も多く報告されました。

地方財政改革についても、三位一体改革に関して、特に地方交付税に関する報告が多くありました。カレントな問題

日本財政学会 第61回大会

日本微生物生態学会 第20回大会

経済学部 教授
越智　洋三

に対する強い関心が会員に見られました。

国立大学の独立法人化に伴う財政問題にあてた共通論題でしたが、財政問題と同時にそれに伴う高等教育のあり方についても議論が及びました。

これだけの国債が累積している状況で、インフレが発現しないメカニズムについて、日銀の金融政策を中心に議論が展開されました。

韓流ブームに乗ったわけではないのですが、今大会の分科会で参加者が最も多かったのは韓国特別分科会でした。この分科会は韓国財政・公共経済学会と日本財政学会との交流を記念して設けられたもので、韓国学会員及び日本の会員が、現在の韓国の財政が直面している問題について議論を展開しました。韓国及び中国からの留学生が増えるとともに、日本から両国へ留学する会員も増え、インドネシアも含めたアジア財政の研究が急速に進んでいます。

例年のビッグ・イベントであるシンポジウムのテーマは「グローバル化は西欧型福祉国家を変えたのか」でした。元スウェーデン大使を含めた4人のパネリストが、福祉国家解体説を展開する1パネリストに対して反論するという形で議論が展開されました。

総じて言えば、危機的状況にある日本財政の再構築に向けた実践的課題が数多く提起され、解決されなければならない問題がまさに浮き彫りにされた大会でした。

日本微生物生態学会 第20回大会

工学部 教授
遠藤　銀朗

私たちは目に見えるものだけを確かな存在だと思い込んでいます。また、確かに目の前に存在しているものでも、意識することがない場合には、そのものの存在に気付かないことがあります。「微生物」は、私たちが日常で存在を意識することのできない生き物の代表的なものです。微生物は、多少曖昧ですが「通常の人間の肉眼では認識できない微小な生物」と定義されています。

そのような目に見えない微生物によって現在の地球環境が作り上げられ、そして我々のような目に見える生物の生存を根底で支えている、と説明されて直ちにこのことを理解できる人は多くはいません。しかし、目に見えないものの重要性を科学的に立証する対象として、微生物の存在を理解し微生物の働きを研究することは、これからの地球の生命とそれを取り巻く環境や人間の社会的諸活動などのあるべき姿を決定するための、重要な科学的基礎を確立することにつながります。

さて、2004年11月20日(土)から23日(火)に東北学院大学土樋キャンパスにおいて開催された日本微生物生態学会第20回大会には、全国の大学や研究機関より微生物学の研究者・教育者が大勢集まり、今後の科学知の発展に大きく貢献する意義のある大会を開催することができました。この学会で発表される研究成果のレベルは、欧米の微生物学会でのそれらと比較してもさらに高く、そのおかげで我が国における微生物研究は世界的にも大変高く評価されています。また、大腸菌を用いた遺伝子の解析によって始まった分子生物学が、近年大発展を遂げ、生命科学の基盤をつくるに至ったことから理解できるように、微生物学は現代生命科学の原点ということができます。したがって、微生物生態学会は今日のライフサイエンスとバイオテクノロジーの基礎を築く上で重要な役割を果たしている学会といえます。

「微生物生態学」は別名で「環境の微生物学」とも呼ばれ、地球環境の形成やその恒常的な維持に重要な役割を果たしている微生物の生態と機能を明らかにするための学術です。この学術分野からは、地球環境を保全するための工学技術にとっても重要な科学的発見が提供され続けています。仙台は、新制大学が発足して間もない時期に東北大学に着任した植村定次郎先生など、多くの著名な研究者が微生物生態学の学術基盤を作り上げたことによって、日本における微生物生態学の発祥の地と呼ばれています。そのような伝統に立って、今回開催された日本微生物生態学会第20回大会が仙台において、しかも東北学院大学において開催されたということの意義は大変大きいものでした。このことは、「環境の微生物」に関する科学知の拠点として東北学院大学で行っている微生物学に関する研究の成果が、日本国内の各大学・各研究機関の研究者からリーダー的拠点と呼ばれるのに値すると認められていることを示しています。

法学部法律学科 4年
硬式野球部キャプテン

星　孝典 さん

当面の目標は二軍正捕手。経験を積んで実力をつけたい。

本学初のプロ野球ドラフト指名を獲得した星孝典君にお話しを聞きました。

読売巨人軍のドラフト6巡目指名ということですが、プロ野球を意識したのは、いつ頃ですか。

大学に入学する時には、プロ野球入りを考えていました。小学校1年生から野球を始め、中学校も高校も野球をやっていましたから、夢でもありました。ただ、高校を卒業してプロ野球にというほどの自信はなかったのです。自分の中で、夢が現実味を帯びてきたのは、4年生の時に世界大学選手権の候補に選ばれ、合宿に参加したことがきっかけでした。関東の大学で活躍している選手とプレイしてみて、実力に差がないと実感し、自信がついたのです。ドラフト指名は、二塁送球が平均1.8秒の肩の強さを認めてもらえたのだと思います。

大学時代の野球部の活動で印象に残っていることは、どんなことですか。

1年生の時に、あと一歩のところで東北福祉大学に逆転負けし、優勝を逃したことが忘れられません。この悔しさは、私の中に残りいまだに消えていません。結局4年間で勝ち点を取ったり一勝を上げたりということはあっても優勝はできませんでした。

プロ野球での目標と、将来の夢を教えてください。

目標は一軍正捕手と言いたいところですが、今は尊敬する阿部さんがいらっしゃいますので、まずは二軍正捕手を目指し試合経験を積みたいと思います。将来の夢は指導者になること。そのために教員免許も取得しました。

後輩たちへメッセージをお願いします。

これだと思うものが見つかったら、本気でやってみましょう。きっと何かがつかめるはずです。ただ、人に迷惑をかけずにやるということが大事。周囲と調和しながら、精一杯取り組んでみてください。

日々の鍛錬が認められ主将になった。

工学部機械創成工学科 3年
弓道部主将

萱場　直樹 さん

大学入学時に掲げた目標は、勉学と部活動の両立。とりわけ高校時代から続けてきた弓道には力を注ぎました。部活動は日曜日を除いて毎日。人一倍練習に励み、部活動の運営に関しても、自分から仕事を見つけて動くことを心掛けてきました。そのせいか、1年の時から主幹といわれる幹部に選ばれ、3年次には主将に選ばれました。技術面において私が秀でていたわけではなく、日々の姿勢が認められたのだと思います。推挙してくださった先輩やOBの方々も、そう言ってくださいました。今は引退しましたが、その精神を後輩たちに伝えていきたいと思います。部活動を通して得たものは、一生付き合える「仲間」と、日々鍛錬した「精神力」です。

将来は、コストを低減した製品の開発など、物づくりを通して人の役に立ちたいと思っています。これからその目標に向けてさらに勉学に励んでいきます。

歴史に残る大学祭を創った!!

経済学部経済学科 4年
大学祭実行委員長

須藤　喜久 さん

「誰が熱い!? オレ達熱い!!
何を創る!? 学祭創る!!
オレらにしか創れない祭りはここにある」

一人ひとりが、この言葉を胸に大学祭の準備をしてきました。私が大学祭の実行委員になったのは1年生の時。高校時代に経験した文化祭実行委員での感動を、もう一度経験したいと思ったからです。もちろん高校と大学では規模がまるで違い、楽しさもいっぱいでした。実行委員長を務めた今年度の大学祭では、仙台に大勢のファンがいる北海道のタレントをゲストとして招いたため、土樋キャンパスが学内外の人々で溢れかえりました。予期しないハプニングも多々起こり、大学側の協力を得て対応した一幕もあったほどです。

入学時、大学で4年間過ごすからには、何かをやろうと思っていたのですが、なんと伝説の大学祭を創ってしまいました。

同窓生を訪ねて

株式会社 小松﨑都市開発
代表取締役
小松﨑　衞 氏

地産地消の風力発電事業を目指して

～地元企業が新エネルギー事業に新たなる風を吹かせる～

新たなるwind powerを求めて…

小松﨑　衞（こまつざき まもる）氏

1964年（昭和39年）茨城県岩瀬町生まれ。
1987年（昭和62年）東北学院大学工学部土木工学科卒業。
1990年（平成2年）会社設立（水戸市）。
現在、株式会社小松﨑都市開発 代表取締役。
「ウインド・パワーつくば」風力発電事業並びに土木設計コンサルタントを中心に事業を展開。
1999年（平成11年）NEDO・産業技術総合開発機構との共同事業に採択され本格的に風力発電事業に参入。
2003年（平成16年）自然公園法改訂後、国内初の国定公園内における風力発電施設建設の許可を、環境省と茨城県より取得、さらに経済産業省より事業認定を受け、林野庁より国有林使用許可を民間企業としてはじめて取得。
2005年1月（平成17年）地元茨城県筑波山系にて「ウインド・パワーつくば」風力発電事業を開始。
現在、国内生産風車開発研究事業に着手。

趣味は空手道と歴史物読書。空手道四段。
全日本理工科系大学空手道連盟理事。
妻、中学生の長男、次男と4人暮らし。茨城県岩瀬町在住。

はじめに、小松﨑さんが本学へ入学された経緯からお伺いしたいと思います。

茨城県出身の私が東北学院大学を知ったのは、高校時代の恩師のお陰です。仙台へ初めて来たのは、小雪舞う入学試験の日でした。

大学生活の中で特に印象に残っていることがありましたらご紹介ください。

勉強はそこそこでしたが、とにかく大学生活は空手道、そして友と酒を飲みました。また、1年次には旭ヶ丘寄宿舎・副寮長を、2年次から3年間オリエンテーションリーダーを務めました。

私の人生に最も影響を与えてくれたのが空手道部です。厳しい練習の日々、命を懸けて打ち込みました。時を見極める目、人との駆け引きでの粘り強さ、不屈の精神。すべてが体に染み込んでいます。私は第22期空手道部主将を務め、工学部空手道部初の国体強化選手に選ばれました。その時の「宮城」代表のエンブレムは宝物であり私の誇りです。

「ウインド・パワーつくば」風力発電事業と地域との連携についてお話しください。

風力発電の準備を始めたのが平成11年、そして今、事業を開始することができました。小さな企業の経営者として大きなビジョンを持つということは実は簡単なことではありませんでした。多くの人に「できるわけがない」と笑われました。なんと言ってもその時の悔しさが原動力になったと思います。

それでは「ウインド・パワーつくば」について説明しましょう。テーマは“環境・教育・産業の融和”を掲げました。規模は1000kw級の風車を筑波山系丸山頂上に2機、年間600万kwhの発電を見込んでいます。環境省、経済産業省、茨城県をはじめ、地域の皆さんにご理解をいただきながら進めてきました。私は、事業を説明するにあたり次の点を強調してきました。エネルギーの地産地消を目指し、茨城県の企業による茨城県における新エネルギー事業の展開という点です。中央の大手企業ではなくても、風力発電事業はできること、それが地元企業の活性化へとつながり地域へも貢献できるということです。評価はこれからですが、大きな波紋を投げかけ、大きな声援を受けたことは言うまでもありません。さらに次世代の子どもたちにも地球環境へ関心を高めてもらえるように今後も啓発に努めていく所存です。企業として地元への貢献ということは非常に重大な責務であると考えています。

同窓生として後輩に伝えたいこと、本学に望むことをお話しください。

私は大学時代、社会に出てからと、多くの方々に導いていただいたと感謝しています。人との良い出会いこそが人生を豊かにしてくれると思います。目上の人から引き上げてもらえるような人間、「あいつなら」と言われることが本当にたくさんありました。後輩諸君へは、クラブであれ勉強であれ精一杯時間を使って自分自身を豊かにしていってほしいです。

さらに、私は卒業以来、全日本理工科系空手道連盟の運営に携わってきました。そして2002（平成14）年、第15回全日本理工科系空手道選手権大会を母校、東北学院大学工学部で開催することができました。東京以外の大学での開催は初めてでした。OBの熱意の賜物ではありますが、仙台の大学であってもできるということを再認識しました。今後、東北学院大学が、全国を視野に入れ前進していくことを強く望みます。

学部改組に向けて

教養学部：新学科～教養学部の希望

教養学部長　佐々木俊三

いよいよ学部改組の時期が迫ってきました。長い間にわたって新学科『地域構想学科』の新設準備をしてきましたが、そのことが学外の多くの人に認知されはじめたように思われます。すでに実施されたAO入試や推薦入試では、教養学部の既存学科をしのぐ勢いを見せています。滑り出しが良かったことに安堵するとともに、協力してくれた方々と、このことを率直に喜びたいと思います。

多くの同窓会に出て、新学科の意義を説き、協力を願い出ました。岩手の同窓会では「前から学院に望んできたことがやっと実現するのですね」と、期待の声を聞きました。地域との協力になぜもっと学院は肩入れをしてくれないのか、そんな批判の声も聞きました。こうした批判と期待に応えられるかどうか、新しい実験が始まると思います。

「地域」という言葉が、これまでとは異なった独自の意味をまとい始めている、そんな社会の新しい動きを感じています。中央に吸い寄せられ従属してきた動きではなく、「地域」が着実にその個性に目覚め、自らを大切に熟成したいという静かな意志を蓄えているように感じられます。もしこの動きが真実だとすれば、地域構想学科とこれを準備した教養学部にとってこのことの意味は大きいと思います。なぜなら、教養学部は社会の中に芽生えたこの「地域」の熟成の動きを「新しい風」ととらえ、これを地域とともに考え構想し直していく着実な歩みに参画することになるからです。

同窓との交流を通して、地域には有為な多くの方々がおられることをあらためて知りました。そうした方々の協力を得て、地域をしっかりとした土台の上に再構築したいと願う同胞とともに、教養学部はキャンパスの外に出て、いくつかの拠点を積み上げたいと思います。そこで大学の学問を地域に還元し、地域の抱える諸問題から学問のあり方を学ぶこと、これによって、大学と社会の新しい関係が模索されることを期待したいと思います。

工学部：創設以来の大改革

工学部長　鹿又　武

工学部は2006（平成18）年度に新しい工学部に変わる予定です。工学部改組の骨子の第一は、現工学部の教育・研究の組織を21世紀の人類社会から求められる人材育成と科学技術研究開発の要請に十分に応えることのできる組織にすること。第二は、新しい大学教育・研究を通して、これまで以上に社会的、地域的及び国際的な貢献をすることです。具体的には21世紀の科学技術を重点的に支えるライフサイエンス分野の教育・研究の要素を改組後の各構成学科に包含することにしました。「機械創成工学科」はロボットなどを研究する知能工学分野とエネルギー分野を強化し、「機械知能工学科」に変わります。「電気情報工学科」の学科名は同じですが情報通信工学を中心にして、電気工学、情報工学をさらに強化します。「物理情報工学科」は教育・研究内容を大幅に見直し、ナノテクノロジー・材料分野、デバイス工学、電子計測工学などを包含する「電子工学科」に変わります。「環境土木工学科」は、従来の土木工学、環境工学に加えて建設工学、都市環境工学などを包含する学科に改組し、「環境建設工学科」に変わります。

以上のように2006（平成18）年度の改組は総合科学技術会議が理工系教育として21世紀の科学技術の進展を支える重点分野として掲げている（1）ライフサイエンス（2）情報通信（3）ナノテクノロジー・材料（4）環境の4つの学術分野を新工学部の基幹となる教育・研究分野として取り入れることを目的として、その方針に沿う学部改組として位置付けられるものです。

この大改革は、本学工学部が21世紀の日本にふさわしい高等教育機関の質的改革と普及の担い手となり、持続的発展の基盤を支える最重要、不可欠な知的創造産業の中核になる第一歩であります。今後、工学部は更なる改革を実行し、世界に競合しうる大学を目指して壮大な挑戦に取り組む予定です。

初の「センター試験利用入試」

志願者は1,706人で、平均倍率は27.5倍

本学の入学者選抜方法に、2005（平成17）年度から新たに導入された「大学入試センター試験利用入学試験」（センター試験利用入試）への志願者は、実施9学科合計1,706人で、募集人員に対する競争倍率は27.5倍となりました。

大学入試センター試験への参加大学は年々増え続け、平成17年度は国公私立大学563校、1,628学部で、前年度より20校増えました。新規参加の主な大学としては青山学院大学、西南学院大学、そして本学でした。1月15日（土）と16日（日）の両日実施された大学入試センター試験には、前年より17,000人余少ない569,950人が志願、本学は仙台第一高等学校試験場の実施を担当しました。

本学のセンター試験利用入試導入は、全国、特に遠隔地の本学志望者に応えて受験機会を提供する方策として、また国公立大学との併願が多い志願層への配慮という観点から判断されました。しかし、センター試験利用入試を実施するのは4学部の9学科で、その募集人員も一般入試の定員の一割程度と少ないため、受験生にどの程度のインパクトを与えられるか、一抹の不安を抱えての入試広報展開となりました。受験雑誌や新聞等での広告、入試説明会や進学相談会でも、一定の興味は示されましたが、確かな手応えを感じられない状況というのが率直な感想でした。

結果としては、志願者数は表のとおりで、歴史学科の47.1倍をトップに、人間科学科と言語文化学科でも40倍を超える高い倍率となりました。志願者の内訳をみてみると、一般入試と比較して東北以外の地区からの比率が高く、また進学校といわれる高校からの出願が目立ちました。これは、センター試験利用入試導入の狙いと重なり、効果が出たものと考えています。今後は、合格者、入学者等に期待しながら、その資料を加えて分析し、次年度に活かしていくつもりです。

大学入試センター試験利用入学試験志願者数

学部・学科		定　員	志願者	倍　率
文学部	歴史学科	8	377	47.1
法学部	法律学科	15	401	26.7
教養学部	人間科学科	5	204	40.8
	言語文化学科	5	219	43.8
	情報科学科	5	166	33.2
	小計	15	589	39.3
工学部	機械創成工学科	6	95	15.8
	電気情報工学科	6	94	15.7
	物理情報工学科	6	62	10.3
	環境土木工学科	6	88	14.7
	小計	24	339	14.1
合　計		62	1,706	27.5

COLUMN WELL

讃美歌で門出を祝福

卒業式・入学式のご案内

■平成16年度卒業式
日時：平成17年3月24日（木）
11時～12時30分
会場：仙台市体育館
（仙台市太白区富沢）

■平成17年度入学式
日時：平成17年4月5日（火）
10時30分～12時
会場：仙台市体育館
（仙台市太白区富沢）

例年、東北学院大学の卒業式・入学式は、主役の卒業生、新入生のほか、来賓のご父母並びに先輩や後輩を祝福する在学生等に囲まれながら、キリスト教大学として、讃美歌を歌い、聖書の言葉を聴く礼拝形式で営まれます。

両式典ともに、ご家族どなたでも自由にご出席いただけますよう、お席を用意しておりますので、多数のご出席をお待ちしております。

なお、会場には駐車場がございませんので、公共交通機関でのご来場をお願いいたします。

問い合わせ先
総務部総務課
TEL.022-264-6412

卒業式

入学式

学生による授業評価の完全実施

学長　星宮　望

2004（平成16）年10月28日に本学の第63代学生会常任委員会との合同協議会が開催され、その中で、学生会の代表者から指摘された事項の中に「授業評価アンケート」がありました。その一部を引用すると、いわく、

「現状では、『授業評価アンケート』を実施するかしないかの決定権が各担当教員に委ねられているため、すべての講義でアンケートをとっているわけではないという現状もおかしな話ではないだろうか。『授業評価アンケート』は、本来、学生がその講義を受けて、どう思ったか、どう感じたかを素直に記入できる機会として存在しているはずなのに、マイナス面を書かれることを嫌がり、アンケートを実施しないのは、許されるべきことではないと思われる。大学として、しっかりと『授業評価アンケート』を全学的な制度として確立させて…学生の生の声を真摯に聞き入れ…（る）ようお願いする」

私は、この意見は正当であると思って真剣に受け止めています。本学では、工学部や教養学部では既にほとんどの教員がこの授業評価アンケートを実施していますが、全学のすべての教員にまで至っておりません。できるだけ早く、全学的な規模で、「学生による授業評価」を実施したいと考えています。

このことに関連した本があります。東海大学の安岡高志教授他著『授業を変えれば大学は変わる』（プレジデント社、1999年11月）です。この本の前半には、日本で最初に組織的な取り組みとして行われた東海大学における「学生による授業評価」について、担当教員がそのスタートを切ったきっかけ（1984年1月）に始まり、徐々に大学全体に広がっていくまでの努力と多くの反対者との攻防、そして次第に多くの教員にとって当たり前のものになっていくありさまが記されています。東海大学で学生による授業評価が全学的な規模で実施されたのは、いわゆる大学設置基準の大綱化によって各大学の教育内容の自由化とともに「大学の自己点検・評価」が求められるようになってすぐの1993年とのことです。その後、全国の多くの大学で実施されるようになっています。2004年3月23日の文部科学省の公表データによりますと、全大学の84%で実施されており、2005年度からすべての大学に義務付けられる第三者評価では必須の項目になっています。本学においても全面的に実施することが急務です。

私自身のことを少し紹介しますと、学生による授業評価は、個人的にですが1972年から行っています。1972年に東北大学工学部電子工学科の助教授に就任し、電子回路基礎論（4単位、通年、選択必修）を担当し、後に、セメスター制への対応で電子回路A及び電子回路B（いずれも2単位、半年、選択必修）に分割した時にも、個人的に学生諸君による授業評価を講義の最終回に行い、授業改善に反映する努力をしてきました。その後、教授になってからは、自分の授業の評価をしてもらうときに併せて、カリキュラム全体の構成の不備等についても自由記述を求めて、電気系4学科のカリキュラム委員会などにおける改善に反映する努力をしてまいりました。しかし、組織的な取り組みはなかなかできませんでした。その後、1995年度には全工学部での機運が高まり、設問項目の決定や計算機による読み取りと集計などの具体的な取り組みをようやくまとめて、授業評価が学部レベルで実施されることとなりました。これが東北大学における学生による授業評価の組織的な取り組みの最初であったと思います。その後、いくつかの学部においても徐々に行われるようになりましたが、全学的な取り組みで行われたのは1998年度です。この頃、私は東北大学の10学部の全学教育（教養教育のこと）の責任者である大学教育研究センター長をしておりましたので、全10学部の全学教育のすべての科目について学生による授業評価を行うことにしました。手続き的には評議会の承認をとって行いました。非常勤の教員についても協力していただきました（アンケート実施クラス:476クラス、回収数:22,270）。この時に、同時に、10学部すべてにおいて、専門教育についての授業評価も実施され、これらの大学全体の授業評価の結果を冊子にまとめて1999年度に刊行することができました。

我が東北学院大学においても、是非、5学部すべてにおいて全授業科目について早急に実施できるよう教員各位のご協力をお願いしたいと思います。

文学研究科 文学研究科客員教授 劉小萌先生

2004年4月1日から2005年3月31日までの間、文学研究科アジア文化史専攻の客員教授に劉小萌（Liu Xiaomeng）先生をお迎えし、大学院の演習、学部の東洋史特殊講義などで満洲語文献の講読、漢語インターネットによる現代中国情報、北京の歴史などを担当していただいています。またオープンリサーチ・アジア「流域文化論」にも参加されており、これらのさまざまな場で述べられる見解に我々が裨益されること大です。

劉先生は1952年3月3日生まれ、現在、中国社会科学院近代史研究所研究員（日本の教授に相当する）の任にあります。この時代に生まれた中国の人々が避けて通れなかった歴史に1966年から始まる文化大革命とそれに続く激動の10年がありますが、文革の中心地であった北京で生まれ幼年期を過ごされた劉先生も同様であり、文革の一端である下放※ の潮流に遭遇して学園を離れて内蒙古に赴き、長い間牧民や農民の生活を送られました。学園に戻られたのは文化大革命が終息した後の1978年で、河北大学歴史系に入学卒業した後に、中央民族学院（現在は中央民族大学）の修士課程に入学して満州史・清朝史の碩学王鍾翰教授の下で、博士課程は蔡美彪教授の下で研鑽を続けられて1989年には歴史学博士の学位を取得されました。

研究の中心である満族史と清朝史の分野では『満族的部落与国家』、『愛新覚羅家族全史』、『満族從部落到国家的発展』、『清通鑑・前編』などをはじめとする多数の著書と論文を発表されています。一方、文革が始まった時に10代であったいわゆる「失われた世代」に属している劉先生は、この時代の歴史事実を記録することは歴史研究者として必須の責務と考えられて、『中国知青史』、『中国知青事典』さらに同じ下放経験者から聞き取りなどを行った『中国知青口述史』を出版されています。専門研究と知識青年史の業績は高く評価され、数点が「第一回満学研究成果優秀賞」や「全国優秀図書一等賞」などの栄誉に輝いています。

現代中国の大枠を形成した満洲族政権としての清朝史と中国現代を考えるとき、避けて通ることのできない「激動の10年」を注視し研究し発表し続けられている劉先生の発言は、学生のみならず、とかく概説的な見解に傾きがちな我々の中国観に大きな刺激と影響を与えています。

※【下放】「知識人は農民や牧民などに学ばなければならない」という政策の下で、都市の学生などが数年間にわたり過酷な環境の地方に送られた。

法務研究科 法科大学院で文部科学省補助金プロジェクトがスタート

本学の法科大学院では、原則として、すべての講義を教室備え付けのビデオカメラで録画しています。止むを得ず授業を欠席したときやもう一度授業内容を確かめたいとき、学生はその録画を観ることができます。しかし、現状では、時間、場所、人数に制限があります。そこで、「独自映像教材等による学習支援体制の高度化」という表題のプロジェクトで文部科学省に応募し、3年間で総額ほぼ3000万円の補助金を与えられることになりました。初年度は2004年10月にスタートしています。

今回のプロジェクトの第一のねらいは、授業録画を、学生が自分のパソコンを通じて、いつでも、同時に何人でも利用できるようにするためのシステムを作ることです。

第二は、さらに2種類の独自映像教材の作成で、その一つ目は法律実務教育用の教材です。地元の仙台弁護士会の協力を得て、模擬法律相談の映像教材などを作りたいと考えています。これは、「法曹実務実習」という3年生科目で実際の法律相談を勉強する際に補助教材として活用されます。

作成するもう一つの独自教材は、法学について学習経験が全くない入学生のための法学入門教材です。その最初のものとしては「六法」、つまり法令集の使い方を学べる教材が予定されています。初学者にとっては、繰り返し再生できる映像教材は有益なものとなるでしょう。

これらがすべて実現すれば、「わかりやすく、ていねいで、しかも機能的な」教育を目指す私たちにとって大きな助けとなります。さらに、私たちは、利用者に身近な、地域に根ざした弁護士を育てるという本学法科大学院の設置目的実現に向け、ほかにもさまざまな教育上の工夫を試みるつもりです。

文学部 歴史学科誕生

すでにウーラノス誌上でも紹介されていますように、本学では全学的な組織改編が行われ、2005（平成17）年4月から新たな体制がスタートすることになりました。教養学部に地域構想学科が設置され、大幅な学生定員増が行われることと、文学部の再編が主要な変化です。文学部史学科も、このような変革に伴って大きく変わることになりました。これまで史学科の重要な一翼を担ってきた地理分野が、教養学部地域構想学科に移り、地域の環境を主要なテーマとすることになったのです。

ご承知のように、文学部史学科は、1964年に設置されて以来、歴史と地理をともに学ぶという、特色ある教育研究を推進してきました。40年にわたる学科の歴史の中で、教員や学芸員をはじめ、各方面に多くの卒業生を送り出し、東北地方における本格的な歴史・地理の教育・研究の拠点として評価を得てきたと自負しています。

このたびの再編に伴い、従来の史学科は日本史・東洋史・西洋史・考古学・民俗学の諸分野で構成されることになりました。そこで、本学では従来の史学科の伝統と実績を受け継ぎながら、新たに「歴史学科」を誕生させることにいたしました。新しく誕生する「歴史学科」では、異なる文化を持つ人々の争いや、複雑な国家間の利害関係など現代の世界が直面する多くの問題を考えるために、現代社会の歴史的な成り立ちをグローバルかつ歴史的な視点で追究することを目標にいたします。そして、新しいカリキュラムでは、現代社会の基盤となっているヨーロッパ世界の発展過程、イスラム世界の構造、アジア世界の成長、そして日本列島史はもちろん、日本列島とアジアをはじめ各地との歴史的な関係、さらには「日本」の歴史認識などを中心的に学ぶことにしています。また、従来の伝統を受け継ぎ、ゼミナール形式の課題解決型少人数講義を専門教育の柱とし、考古学・民俗学に加えて歴史学の各分野で実際にフィールドに出て学ぶ実習科目を加えて、実践的な問題解決能力を養うことに重点を置くことにいたしました。また、コンピュータ技術など、将来の職業に生かせる能力の育成にも力を注ぎたいと思います。

新たに設置される「歴史学科」には日本史・西洋史・東洋史・考古学・民俗学各分野に充実した教授陣が揃っています。学生諸君には新しい「歴史学科」で、国際的な視野を持ち、歴史を深く認識して将来を考える能力を身に付けていただきたいと願っています。40年の歴史の中で、史学科で学び、各地で活躍される数千人に上る卒業生の皆さまにも、また、史学科の運営にあたり、ご支援、ご指導いただいた皆さまにも、新しく誕生いたします「歴史学科」をこれまでにも増して、ご支援くださいますよう、あらためてお願い申し上げます。

輝く教育・研究

文学の言葉を読む

文学部（英文学科）助教授　森　慎一郎

“ In the fall the war was always there, but we did not go to it any more. ”（その秋、戦争はずっとそこにあったけれど、ぼくらはもう戦争に行かなかった。）ヘミングウェイの短編“ In Another Country ”の出だしの一文です。同時代の小説家フィッツジェラルドは、この一文を、これまでに読んだ中で最も美しい文章の一つだ、と言っています。どこがそんなにいいのか、と考えてみると、例えば、「戦争」が（ただのモノみたいに）「そこにあった」という素っ気なさ。また「戦争」を“ it ”で受けた“ go to it ”という言い方の妙なぎこちなさ。そして音、“ fall, ” “ war, ” “ always, ” “ go, ” “ more ”と、間のびした「オー」の音とくぐもった子音の連続がもたらす、どことなくうつろな、世界との間に膜ができたような感覚。なるほど作品の基調をなす深い幻滅と脱力感が凝縮されている、などと、いくらか分かったような気になってはみるものの、作家がこの一文に感じ取ったものを十全に理解できたとは思えません。文学研究もいろいろですが、文学が言葉を扱う営為である以上、根底にはやはり、優れた言葉の使い手たる作家の言語感覚に一歩でも近づきたいという思いがあります。

教養学部　近況

教養学部ができて17年目となる2005（平成17）年4月、教養学部はこれまでの1学科3専攻定員200名から、4学科定員400名へと大幅に強化され、学生総数2,000人体制の大きな学部へと姿を変えます。そこで、教養学部の近況を開設時からの沿革を交えて簡単に述べてみたいと思います。

1986年、東北学院は創立100周年を迎えました。教養学部は、100周年記念事業の一環として構想され、1989年（平成元年）、予定より一年遅れて 開設されました。設立の主旨は「国際化、高度技術化、情報化の進む現代社会にあって人間生活の抱える種々の問題に対処する新しいタイプの教養人を育成する」ことにあり、これは今回の改組でも変わっていません。

教養学部は当初から、1学部1学科の利点を生かして専攻の垣根を低くし教員や学生が相互に乗り入れることのできる学際的な性格をセールスポイントの一つとしてきました。もう一つのセールスポイントは、徹底した少人数教育です。開設にあたって、設備と人員の点で大幅な拡充が図られた結果、最も多い時期には、130名近い教員が教養学部に所属していました。新しい広々としたキャンパス、整った施設、200名の定員に対して130名の教員。数字のうえで見る限り、これは大学教育の理想郷です。他の学部の教員諸兄がこれをやっかむなというほうが難しいでしょう。そのため教養学部は、絶えず、「慢性的な赤字体質だ」「あまりに贅沢だ」「これはまるで国立大学だ」との、多くは根拠のない非難を浴び続けました。今回の改組の最大の狙いは、この点の是正にあります。

教養学部が以後今日に至るまで高校生を含めて社会から安定した支持を得ていることは、受験動向に示されている通りです。この間、各専攻に、いくつかの顕著な特徴や変化がみられました。人間科学専攻にあっては、最初はなかった体育学のコースが明確に位置付けられるようになり、当初の3コース制から心理学・社会学・教育学・体育学の4コース制に変わったという点です。言語科学専攻の場合には英語の教員が大幅に減ったこともあって、言語理論と文化理論という二つの焦点をもつ楕円形のような学科内容となり、この形態で安定してきています。2001年度より専攻の名称も「言語文化専攻」に変更されました。情報科学専攻は、当初理学部のような様相を呈していましたが、「情報処理」をキー・コンセプトに再編が進んでおり、理系の学科から情報の学科へと着実に変貌しつつあります。今回の改組を機に、情報科学専攻はかなり思い切ったカリキュラム内容の変更を目指しましたので、情報科学科としての性格が一段と鮮明になるはずです。

今回の改組で教養学部には、地域構想学科が新設されます。この新設学科は、コース制を採っているわけではありませんが、地域住民が自分たちの視点でよりよい地域社会をつくっていくための知識とノウハウとを学ぶことを目的として、自然環境系、健康スポーツ系、社会政策系と、これらの基礎部門との四つの柱からなっています。

改組によって教養学部は4学科制になります。しかし、これまでと同様に学科の垣根を可能な限り低くして、今後も教養学部設立の理想である学際性を維持していきたいと考えています。

輝く教育・研究

映像社会学の挑戦

教養学部教授（人間科学専攻）　竹内　彰啓

写真、映画、テレビ番組、ビデオ、World Wide Webなどを通して、私たちは日常生活で常に視覚映像に触れるようになってきています。デジカメやケータイ・カメラなどのより利用しやすくなった視覚映像機器によって、私たちの多くがその周りの世界を視覚映像化できるようになってきました。私たちは、もはや視覚映像メディアの消費者にとどまらず制作者でもあります。視覚映像の文化やコミュニケーションにかかわるこうした趨勢は、社会学的な研究関心を大いにかき立ててくれます。第一に、視覚映像を現代の幅広い社会的・文化的脈絡の中に位置付けてその意味は何かを問い、第二に、社会学と関連分野において視覚映像を用いた研究がどのように可能であったのかその歴史を展望します。第三に、視覚映像は、記録の客観性と視点の主観性という矛盾した性質を合わせ持っているので、視覚映像の社会的構成の問題が重要になります。私たちは何を見、また何を見ないかの社会・文化的に形作られるメカニズムです。

この未開拓のフロンティアは、映像社会学(visual sociology)として研究が緒に就いたばかりです。現在、視覚映像の上記の主題を理解し視覚映像の方法を社会調査に活用するためのテキストを構想しています。

国際交流部より

International exchange info.

学術交流ならびに教育協力の近況

2004年は、教育及び研究の国際交流で往来の盛んな年でした。東北学院大学は、3月8日にニューサウスウェールズ大学(UNSW)(豪州)と、3月9日にはビクトリア大学(UVic)(カナダ)と、そして6月10日にはサヴォア大学(フランス)と「学術交流ならびに教育協力協定」を締結しました。更に、具体的な学生交流を行うために、各大学と協定の協議に入っています。10月14日には、UVicでジム・アングリン国際交流部長と学生交換に関する協定(案)の詰めを行いました。また10月29日には、UNSW国際交流副部長のポーリン・テーラー氏を本学に迎え、同じく学生交換に関する協定(案)の細部について協議しました。UNSWはシドニー市近郊にあり、1999年に創立50周年を迎えた豪州屈指の総合大学で、40,000人を超える学生数、8,800人の留学生が9学部で学ぶ研究大学です。本学との学生交流については、相手の国の言語で専門科目を履修できるレベルの学生の交換を希望しています。UVicは庭園都市として知られるビクトリア市に位置し、1963年に創立された、カナダ有数の公立総合研究大学です。学生数18,000人、外国人留学生数は2,000人であり、9学部を持っています。サヴォア大学は、スイスにほど近いローヌアルプ地方に位置し、1979年に創立されました。学生数12,000人、外国人留学生数1,000人が3つのキャンパスに分れて学び、5学部1工科大学2高等工学院を有する総合大学です。

本学国際交流部では、既存の国際交流関連プログラムの改善や充実を図りながら、更なる学術交流ならびに教育協力の発展を目指しています。

国際交流協定校と協定対象校※ (2004.10.1現在)

University of Durham　ダラム大学(イギリス)
University of Ulster　アルスター大学(イギリス)
Fachhochschule Wiesbaden　ヴィースバーデン大学(ドイツ)
Université de Savoie　サヴォア大学(フランス)
Nankai University　南開大学(中国)
Pyongtaek University　平澤大学校(韓国)
Daebul University　大仏大学校(韓国)
※ The University of Sydney　シドニー大学(オーストラリア)
University of New South Wales　ニューサウスウェールズ大学(オーストラリア)
University of Victoria　ビクトリア大学(カナダ)
Ursinus College　アーサイナス大学(アメリカ)
Franklin and Marshall College フランクリン・アンド・マーシャル大学(アメリカ)

問い合わせ先　国際交流課
TEL.022-264-6425/6404
E-mail ico@tscc.tohoku-gakuin.ac.jp

研究所・センターより

Institute for Research and Center info.

人間情報学研究所の活動

人間情報学研究所は、人間情報学に関する調査・研究を行いその発展に寄与することを目的とし、大学院人間情報学研究科の付設機関として1995年4月に設置されました。当研究所の研究所員は、大学院人間情報学研究科や教養学部在籍教員78名で構成されています。

所員の研究成果は、研究所の紀要である『人間情報学研究』を中心に毎年発表され、原著論文はもとより研究ノートや各種研究会の報告、研究所主催の講演会の概要、所員紹介等多彩な内容になっています。個人研究のほか、所員と大学院生との共同研究も数多く発表されていますが、これは大学院生にとっては貴重な研鑽の場となっています。

また、人間情報学という観点からさまざまな分野の講師を学外よりお招きし、毎年秋に講演会を開催しております。2004年11月25日開催の第10回講演会では渡辺誠氏(東北大学大学院歯学研究科教授)から「歯と人生」と題してご講演いただき、250名を超える聴講者で、立ち見も出るほどの盛況ぶりでした。この講演の内容は、2005年春刊行の紀要第10巻に掲載予定です。なお、過去の講演会や紀要の記事の一部は、当研究所のホームページからも見ることができます。紀要は本学図書館のみならず、全国の大学や図書館に配布していますので、是非一度お手に取ってご覧いただければ幸いです。

問い合わせ先　人間情報学研究所
TEL/FAX.022-375-1170
URL http://www.ghi.tohoku-gakuin.ac.jp/kenkyujyo/

カウンセリング・センター秋季公開講演会報告

カウンセリング・センター恒例の秋季公開講演会が、10月20日(水)午後、土樋キャンパスで開催されました。今年は慶應義塾大学文学部講師・学生相談室カウンセラーの平野学先生を講師に迎え、「カウンセラーからのメッセージ―今を生きる君たちへ―」と題したお話を頂きました。平野先生は、長年の学生相談のご経験から、現代社会の特徴を指摘しつつ、その中で生きていく若者に向けて暖かいエールを送ってくださいました。

問い合わせ先　カウンセリング・センター
TEL.022-264-6410　FAX.022-264-6511

図書館より

Library info.

図書館の「掘り出し物」

図書館は、本を読んだり研究したりするだけでなく、書物を眺めて楽しむこともできるところです。本学中央図書館では、所蔵している貴重書や豪華本の一部を2003年に紹介展示しました。その中には、1455年にマインツで刊行されたグーテンベルグ『四十二行聖書』のうち2葉やマルティン・ルター(1483～1546)の著作の初版本(全18冊所蔵)、96点の木版挿絵やジョルジョ・ヴァサリによるダンテの肖像画が載っているサンソヴィーノ編ダンテ『神曲』初版本(1564年)などがあります。さらに東洋の印刷創始期の重要資料といわれる百万塔陀羅尼のうち『無垢浄光経自心印陀羅尼一巻』(770年刊 元本学教授 故・渡利千波先生寄贈)も展示しました。

展示に供さなかった書物にも興味深いものがたくさんあります。例えば、『天正使節ローマ法王接見記』初版本(1585年刊)や『慶長使節ローマ法王接見記』初版本(1615年刊)などです。両者を併せて見ることで、ヨーロッパ文化に接した当時の日本人の様子が、より鮮明に浮かんでくるのではないでしょうか。また数は少ないのですが、意外なことに江戸中期の大内絵・源氏物語や土佐派源平合戦図の那須与一など絵画も所蔵しています。

ファクシミリ版ではありますが、中世の豪華本も見事です。図書館は、同時に美術館でもあり博物館でもあると言えるでしょう。

問い合わせ先　図書情報課
TEL.022-264-6491
URL http://www.lib.tohoku-gakuin.ac.jp
E-mail query@lib.tohoku-gakuin.ac.jp

サンソヴィーノ編ダンテ『神曲』初版本(1564年)

入試センターより

Admissions info.

一般入試(前期日程)の志願状況

2005(平成17)年度入学者選抜のための一般入試(前期日程)が2月1日から4日まで、仙台、多賀城の本学キャンパスのほか、全国7ヶ所(札幌、青森、盛岡、秋田、山形、郡山、東京)の試験会場で実施されました。

志願者は全学で8,047名(昨年は8,125名)、募集定員に対する倍率は6.9倍で、各学科の志願者数と倍率は次の通りでした。

英文学科(昼)	845名	(6.7倍)
英文学科(夜)	90名	(7.5倍)
キリスト教学科	0名	(ー倍)
歴史学科	682名	(9.1倍)
経済学科(昼)	1,867名	(7.6倍)
経済学科(夜)	150名	(6.0倍)
経営学科(昼)	1,004名	(7.2倍)
経営学科(夜)	116名	(7.7倍)
法律学科	995名	(6.2倍)
人間科学科	441名	(8.8倍)
言語文化学科	344名	(6.9倍)
情報科学科	257名	(5.1倍)
地域構想学科	297名	(5.9倍)
機械創成工学科	305名	(6.9倍)
電気情報工学科	324名	(7.4倍)
物理情報工学科	139名	(5.3倍)
環境土木工学科	191名	(4.3倍)

なお、3月8日には一般入試(後期日程)が行われます。

問い合わせ先　入試課
TEL.022-264-6455　FAX.022-264-6377
E-mail nyushi@staff.tohoku-gakuin.ac.jp

歴史を伝え今に導く 9

東北学院労働会

経済学部教授　仁昌寺　正一

かつて東北学院に苦学生のための“労働会”という組織があったことは、よく知られています。東北学院の開院直後の明治25年3月にわずか6名によって細々と始められましたが、仙台市民の日常生活に密接に関連するさまざまな事業を次々に手掛け、4年後の明治29年には、当時の在学生の半数に及ぶ90人余りにもなっていました。このような成長が可能だったのは、これらの苦学生に対する仙台市民の信頼と支持が大きく増していったからにほかなりません。そのことは、当時の新聞で

「会員いずれも非常の勉励と信実とを旨とし取扱うが故に、目下大に信用を得て依頼者の日々増殖する」(『奥羽日日新聞』明治28年6月20日)とか「同会員は、朝に星を戴きて乳罐(にゅうかん)を提(さ)げ、夕に月を踏んで新聞を配り、或は味噌醤油を売り、牛肉を響(ひさ)ぐ等、種々の艱辛(かんしん)を嘗(な)め、幾分の資金を得て蛍雪の業に孜々(ししょう)たりとは感ずべき」(『東北日報』明治29年5月13日)

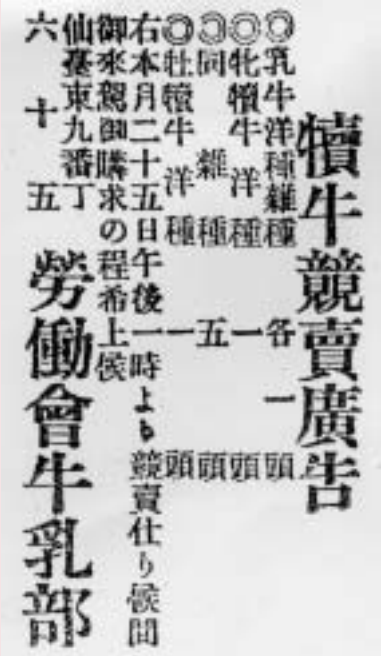
と報じられていることからもうかがえます。

明治30年代になると、労働会は、いわば全盛期を迎え、事業内容を大幅に拡充しました。例えば、東八番丁に塾舎を建設し、それまで2、3ヶ所に借家住まいであった会員をここに収容しました。これによって人材の効率的活用が可能となったわけです。また、この塾舎に隣接して英文活字も取り揃えた印刷所(金子記念印刷所)を開業しました。ちなみに、これは後に「東京以北で最良の印刷」(『東北学院百年史』365ページ)という評価もなされ、注文が殺到したということです。さらに、十数頭の乳牛の飼育と牛乳・牛肉の販売、加えて西洋洗濯所(ランドリー)の開設もなされました。これらは、当時の仙台市では、いずれも時代の先端を行く画期的なものでした。

とはいえ、このようにしても、多くの苦学生の生活費と学費を十分に賄うことはできず、常に赤字経営に悩まされていました。そのため、東北学院当局からの補助を恒常的に受けざるを得ず、また東九番丁牛舎で飼育されていた乳牛を、たびたび売却せざるを得ませんでした(下の新聞広告は、その時のものです)。

そして、やがて明治末から顕著になった仙台市の都市化の進展に伴う民間資本の参入により、労働会の事業分野は狭められていき、大正10年3月、ついに30年に及ぶ歴史を終えたのでした。しかし、この間、多くの優れた人材を輩出したことなど、東北学院の歴史に輝かしい足跡を残したことはあらためて言うまでもありません。

今日、夜間主コースの「勤労学生」を対象に給付奨学金制度が設けられ多くの学生が利用していますが、これは、かつての労働会の精神を受け継いだものなのです。



東北学院労働会の新聞広告(『河北新報』明治41年4月15日)

就職部より Placement info.

求められるコミュニケーション能力と知的バイタリティー

2004（平成16）年度における学生の就職活動も終盤を向かえようとしています。最終的な就職率はいまだ確定していませんが、景気の上昇と相まって昨年度よりは幾分向上しているようです。しかし、企業の採用条件は年々ますます厳しくなってきています。

最近、一般企業・教員・公務員などの職種を問わず、人事採用担当者からよく聞かされる言葉があります。それは、「コミュニケーション能力」と「知的バイタリティー」です。これまでは、主にコミュニケーション能力の重要性に力点が置かれてきたようですが、ごく最近になって知的バイタリティーの重要性が指摘されるようになりました。実際、仕事の場では、語る内容があってこそコミュニケーションも可能になるわけですから、当然のことといえます。今年度の採用面接試験の内容を分析すると、単なる技巧的なコミュニケーション能力ではなく、とりわけ知的バイタリティーに裏付けられた、目的志向型のコミュニケーション能力が高く評価されているようです。

知的バイタリティーとは、基礎学力（具体的一例として、日本語の読み書き、平易な英会話、ITの活用、指数・対数程度の計算）に裏付けられた専門的な知的能力と探究心のことです。とりわけ基礎学力は、知っているだけでは不十分であり、できて使えるようになるまでの鍛錬が求められます。また専門分野に関しましても、知識の豊富さはもとより、それらを関連付け、ストーリーとしてまとめることのできる能力が要求されています。

2005（平成17）年度は、この傾向にさらに拍車がかかり、採用条件も一段と厳しくなるものと予想されます。知的バイタリティーに関する内容は、教育に関するものではありますが、就職部といたしましても、採用側の求めている情報の発信を通して、学生の就職支援のためにかかわっていくつもりです。また今後は、従来の就職支援業務内容を吟味・検討し、学生のニーズにより一層適切な対応ができる体制の構築を図る所存です。関係各位の皆さまのご協力とご支援をお願いいたします。

問い合わせ先

土樋キャンパス就職課	TEL.022-264-6481	FAX.022-264-6486
多賀城キャンパス就職係	TEL.022-368-1101	FAX.022-368-1118
泉キャンパス就職係	TEL.022-375-1161	FAX.022-375-1534

教育研究振興資金募集のお願い

学校法人東北学院では、平成16年4月1日から平成21年3月31日の期間、次の事業の完遂に向けて教育研究振興資金を募集しております。広く皆さまのご理解とご支援をお願い申し上げます。

【募金目標額20億円】
1.東北学院大学キャンパス整備
2.東北学院中学校高等学校校舎建設
3.東北学院榴ヶ岡高等学校体育館および管理棟建設
4.東北学院会館（仮称）建設
5.東北学院育英奨学基金の増額

詳しくは、東北学院法人事務局財務部会計課までお問い合わせください。
〒980-8511 仙台市青葉区土樋1-3-1 TEL.022-264-6467 FAX.022-264-6510

学校法人 東北学院

東北学院大学

▮土樋キャンパス
大学院：文学研究科、経済学研究科、法学研究科
法務研究科
学　部：文学部・経済学部・法学部（各3・4年）、
夜間主コース
〒980-8511 仙台市青葉区土樋一丁目3番1号
TEL.022-264-6411 FAX.022-264-3030

▮多賀城キャンパス
大学院：工学研究科
学　部：工学部
〒985-8537 宮城県多賀城市中央一丁目13番1号
TEL.022-368-1116 FAX.022-368-7070

▮泉キャンパス
大学院：人間情報学研究科
学　部：文学部・経済学部・法学部（各1・2年）、
教養学部
〒981-3193 仙台市泉区天神沢二丁目1番1号
TEL.022-375-1121 FAX.022-375-4040

東北学院中学校・東北学院高等学校
〒980-0811 仙台市青葉区一番町一丁目9番1号
TEL.022-227-1221 FAX.022-227-6302

東北学院榴ヶ岡高等学校
〒981-3105 仙台市泉区天神沢二丁目2番1号
TEL.022-372-6611 FAX.022-375-6966

東北学院幼稚園
〒985-0862 宮城県多賀城市高崎三丁目7番7号
TEL.022-368-8600 FAX.022-309-2655

OYPANOΣ
ウーラノス
東北学院大学　広報誌　vol.18

広報誌編集委員会

委員長	総務担当副学長	関谷　登
副委員長	総務部長	高橋　征士
編集長	経済学部教授	原田　善教
委員	宗教部長	佐々木哲夫
	文学部教授	遠藤　健一
	経済学部教授	小笠原　裕
	法学部教授	塩屋　保
	工学部教授	石川　雅美
	教養学部助教授	塚本　信也
	総務部次長	菅野　健
	総務部調査企画課長	井上　捷二
	総務部総務課長補佐	斎藤　信二
	総務部調査企画課長補佐	小野寺芳典
	総務部調査企画課	石上　貫繁

東北学院大学広報誌『OYPANOΣ（ウーラノス）』に関するご意見・ご質問をお待ちしております。

発行日は、5月15日・10月20日・2月20日です。

発行日　平成17（2005）年2月20日
編　集　東北学院大学　広報誌編集委員会
発　行　東北学院大学
〒980-8511
仙台市青葉区土樋一丁目3番1号
TEL.022-264-6424 FAX.022-264-6364
URL http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/
E-mail c.kikaku@staff.tohoku-gakuin.ac.jp
印　刷　（株）エイエイピー

古紙配合率100％再生紙を使用しています
この印刷物は環境にやさしい植物性大豆油インキを使用しています。